

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	介護・医療連携におけるカルテの有用性
演者名	西田美幸、袴田智伸、篠田裕美、五味一英、遠矢純一郎
所属	桜新町アーバンクリニック在宅医療部

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告 2. 症例シリーズ報告 3. コホート研究 4. 症例対照研究 5. 調査研究 6. 介入研究 7. 二次研究 8. 質的研究 9. その他研究	NO.
		5
【目的】自宅での療養を可能にするためには、医療と介護の 2 つのサービスが適切に提供される必要がある。特に自宅での看取りを希望する場合、医療と介護の連携は必須で、自宅療養の継続可能に大きく関与すると考えられている。 介護職者との連携のため、当院では患者さんの同意の元、診療の 1～2 日後にカルテを関係する介護事業者へ送付するという取り組みを行っている。 今回、自宅看取りを行う際に介護職者がどのような点を難しいと感じているかを調査した。また、カルテ送付の利点・問題点を調査し、介護と医療の連携のため今後どのように発展させていけばよいかを考察した。 【方法】カルテ送付を行っている連携ケアマネージャーと、当院との連携を行っていない地域のケアマネージャーへアンケートを行い、自宅看取りに対して感じている問題点を比較した。 また、連携ケアマネージャーへ対しカルテを送付についての意識調査を行った。 【結果】自宅看取りを行った際に難しいと感じた点は、カルテ送付を行っているケアマネージャー、いないケアマネージャーともに、家族への対応をもっとも難しいと考えていた。しかし、カルテ送付を行っている事業者は主治医との連携に対しては難しいと考えている割合が低かった。 カルテ送付に関する調査では、約 7 割のケアマネージャーが役立っていると回答した。また、7 割が実際にカルテをみて患者宅への訪問を計画したことがあるとした。しかし、約 7 割がカルテ送付が遅いと感じていた。 【考察】カルテ送付を行うことで、介護職者は医療職者との連携が取りやすいと感じるようになったと考えられ、介護と医療の連携に役立っていると思われた。しかし、情報としては即時性が欠けていることがわかった。早く情報を共有するには情報共有方法を検討する必要があるが、現時点で介護と医療の連携を強化するために有用かつ簡便な方法であると考えられた。		